

Fukuoka University MEDICAL SCIENCE NEWS

No. 70

編集・発行
福岡大学医学会
福岡大学医学部内

福岡大学医学会ニュース

医学研究科長を拝命してからその任期も折り返し点を過ぎ、来年度の大学基準協会による7年ぶりの認証評価も間近に迫ってきました。文科省が主導する大学院教育「実質化」のテンポは日々増しており、いまや待ったなしのスピード感を持った改革が求められています。

既に巷で喧伝されていることですが、日本の大学院制度は、多様化やグローバル化の時代の潮流にうまく適合しておらず、一部の大学を除いて世界の動向に後れを取っていると言われていています。日本の大学院教育の歴史はかなり古く他の先進諸国に匹敵しますが、第二次世界大戦前は主に「学位（博士号）授与」の制度としてしか機能していませんでした。しかし戦後の大変革期にアメリカの大学院制度に倣った「課程制大学院」制度が新設され、単なる学位の授与に留まらない、高度な知識や技術を有し自ら課題を設定して社会に貢献できる人材を育成することが、大学院教育の重要な使命となりました。

大学院研究 教育改革に向けて

福岡大学医学研究科長 井上 隆司

にもかかわらず、体系的な教育カリキュラムに従った人材育成は進まず、大部分の大学院生は、（特に医学分野では）研究室単位の活動を遂行する人員として位置づけられ、その「見返り」として学位が授与されてその後のキャリア形成に資するといった面が強かったのは否めません。

このような状況を打開すべく、昭和63年に中央教育審議会に大学院部会が発足しました。爾来、この部会の答申に基づいて、大学院に対する社会の要請の多様化・複雑化・高度化に対応した、入学資格の弾力化（社会人入学、通信制大学院

等）、世界水準の学術研究を担う人材の育成、高度専門職業人の養成、グローバル化の促進等、数々の研究教育改革に関する提言が文科省からなされ、それに従った（課程制）大学院教育の「実質化」が進められてきました。本研究科では過去十数年間に実施された、講座制から6つの専攻分野（専攻系）

への組織改編、総合研究室の創設、コースワーク・リサーチワークに応じた教育カリキュラムの改正、社会人入学、基礎系・臨床系研究者養成コース、高度専門職業人育成コース（癌プロ、医療イノベーションコース等）の導入、大学院生経済支援策（RA、TA、給付型奨学金）の実施などがこれに当たります。しかし実情は、他の多くの医学系大学院と同じく、依然トップダウン式の国策に追随した消極的なレベルにあります。とりわけ本研究科では、臨床系大学院生の比率が高くまたその多くが診療業務のために研究に必要な時間を十分に確保できていないこと、基礎系の大学院生数が少なく専攻系による偏りがあること、大学院修了後に医学研究者を目指す割合が低いこと、人材育成に不可欠な体系的なコースワーク（共通教育）のためのカリキュラム構成が不十分であることなど、多くの問題が山積しています。更に、高額授業料や経済支援不足のために長時間のアルバイト（週平均20時間以上）を強いられる実態が上記の傾向に拍車をかけているようです。

これらの問題に対して実効性のある施策を得るのは容易ではありませんが、本研究科担当教員の先生方には、以上の問題意識を是非共有していただき、今後、本研究科の実情を踏まえた漸進的且つ着実な改革の推進に強力な支援を賜うことをここに心からお願いし、新春のご挨拶といたしたく存じます。



新風

new phase

平成 26 年 10 月 1 日付けで
本学へ赴任、昇格された方に
自己紹介をしていただきました。



再生・移植医学教授
小玉 正太

平成 26 年 10 月より、再生・移植医学講座の主任教授を拝命致しました。再生・移植医学講座は平成 19 年に Translational Research 部門として基礎系講座に配置・設立され現在に至ります。

私は平成 2 年に福岡大学医学部を卒業し、外科学第 1 講座（現消化器外科）に入局後、出向先をローテーションしました。その後、愛知県がんセンターでチーフレジデントを経て、福岡大学大学院に進学し移植免疫学を専攻しました。大学院卒業後は博士研究員として、Harvard Medical School の関連施設である Massachusetts General Hospital に留学し、その後 Harvard Medical School の大学教官として採用されていました。気がつけば 9 年以上を米国で過ごしましたが、平成 21 年 4 月から学長付准教授として福岡大学に着任し、平成 24 年 4 月からは医学部講座の准教授となっています。

教室では再生医学や幹細胞研究をはじめ、細胞移植や血管・リンパ管新生の萌芽的テーマを中心に研究をすすめています。

ます。特に臍島再生に関しては、今までの研究の知見から、組織工学的な手法や新たな移植部位の検討により、新規の臨床試験を念頭においています。また臨床部門では細胞移植医療として臨床臍島移植を啓発・推進していますが、先進医療 B で施行されている臨床試験終了後は当施設の保険診療として細胞移植治療の主軸となること目指しています。この他にもリンパ管新生を促す、虚血肢の治療など新たな臨床試験を準備する分野もあり、今後は学内外で関連科との連携を一層深め、一つでも多くの臨床研究を診療の場に橋渡しして行きたいと考えています。

平成 27 年 4 月からは医学部講座に加え寄付講座が設立され、また福岡大学基盤研究所としては再生医学研究所の発足が内定し、福岡大学病院では再生医療センターの設立も準備されています。今後とも皆様のご指導ご鞭撻のほど、どうぞ宜しくお願い致します。



医学教育推進講座
教授
安元 佐和

平成 26 年 10 月に新しい医学教育推進講座が開講しました。この講座の大きな役割は、福岡大学の医学生が、社会に貢献できる良き臨床医、研究医に育つよう医学教育を充実させることであると考えています。現在、教室員は八尋英二講師と 2 名ですが、医学教育計画部の出石教授と連携して新しい取り組みを始めています。

日本の医学教育は大きな変革期にあります。医学教育モデ

第 41 回 医学部慰霊祭



第四十一回福岡大学医学部解剖体慰霊祭は、ご遺族並びにご来賓の方々、本学教職員と学生約四百名が参列し、平成二十六年十月十八日（土）午後二時から福岡斎場において厳粛に執り行われました。

今回祀られた霊位は、学生の医学教育の目的で、系統解剖のために献体された三十柱、病院で死去されて病因究明のために病理解剖を御承諾頂いた二十九柱、合わせて五十九柱でした。

献灯献花の後、厳粛な雰囲気につつまれて慰霊祭は進行し、朔 啓二郎医学部長は祭詞の中で、医学の発展のために欠くことのできない解剖にご献体頂いた霊位とそのご遺族、さらに、ご協力を頂いた各種関係機関に敬意と謝意を表されるとともに『私どもは、日々花を供え、香をたいて五十九柱の科学に対する貴きご献身を偲び、敬意と感謝の念を表していますが、本日、ここに一堂に会し、皆様方の崇高な御遺志を今一度思い起こして、今後益々、勉学、研究に励み、人類の幸福と福祉に貢献できま

ルコアカリキュラムの改訂によるアウトカム基盤型の医学教育では、卒業時に実践的総合力、コンピテンス（医学知識、基本的診察手技、臨床推論 状況対応力 コミュニケーション、チームワーク 情緒 モラル 批判的好奇心 研究マインド、国際性、地域貢献など）を到達目標とし、その能力が客観的に評価できるコンピテンシーが求められます。また医学教育の国際的質保証が求められ、9項目にわたる分野別認証項目に基づき外部評価を受け、福岡大学医学部もこの認証を受ける予定です。これは米国 ECFMG が 2023 年以降、国際水準の認証を受けた医学部を卒業しなければ、アメリカでの医師国家試験の受験資格を与えないと通知したことが発端になっています。また日夜増え続ける膨大な医学知識を習得するには、低学年からの基礎医学と臨床医学の統合、シミュレーション教育の推進、臨床実習の充実（72 週）などが求められており、カリキュラム改変の目標となっています。実習期間の延長のみでなく質の高い臨床実習するために、教員、学生ともに医学教育に対する認識を変えていく必要があります。学習者中心の双方向性の授業形態、症例ベースの PBL、医学英語コミュニケーション、プレゼンテーション能力をあげる教育が必要になります。

医学教育推進講座は医学部情報センター（図書館）4F に出来ましたので、ぜひお寄りいただき、ご意見、ご助言をいただければと思います。医学生、教職員ともに、福岡大学医学部で学べることを誇りに思えるような医学教育に取り組みます。どうぞご指導、ご鞭撻の程よろしく願いいたします。全員で丸となって国試合格 100%を目指しましょう。



救命救急医学准教授
岩朝 光利

井上亨教授、石倉宏恭教授両先生のご推挙によりこの度准教授を拝命いたしました。福岡県糟屋郡出身、青雲高等学校卒、福岡大学医学部（バスケ部）を平成 6 年に卒業しました。朝長正道先生の脳神経外科教室に入局し、研修医の頃から臨床の第一線である救命救急センターで活躍することを志してきました。研修医時代に始まり関連病院での院外修練～大学院（九州大学）～脳神経外科専門医取得修練～脳血管内専門医取得のための国内留学（社会保険小倉記念病院）～現在に至るまで、様々な指導医の先生方に厳しいご指導を頂き、恵まれた環境で修業を積むことができました。この経験を生かして今後は後輩である福岡大学医学生への教育を熱く行う所存です。福大生は御両親御親族に愛情一杯

に育てられ、期待の星でもあるため、根がまじめで有能な学生が多いです。しかし不器用で要領が悪く、少しおっとりしています。そのため真剣さ、緊張感、目標達成欲が足りない場合もあります。医療の現場では患者さんを中心にたくさんの医療従事者の協力を得て、最善最高の医業を行っていかねばなりません。そのためには常に高い志と向上心を持って、福大生が苦手な勉強・研究に一生懸命に取り組む努力が必要です。実際私もその医業の証である論文執筆がおろそかになりがちであったことを自覚し反省しております。この私の経験の全てを医学教育に生かし、一人でも多くの立派な熱い臨床医を育てると同時に、自己研鑽を怠らず頑張ります。



筑紫病院脳神経外科
准教授
堤 正則

このたびは風川清教授のご推挙により脳神経外科・准教授を拝命致しました。私は平成 6 年に佐賀医科大学医学部を卒業し、そのまま佐賀医科大学脳神経外科教室に入局しました。その後は主に脳血管障害に対する外科的治療を習得するため様々な病院で修行を行ってきました。平成 12 年に脳神経外科専門医を習得後、ご縁があり平成 13 年より筑紫病院へ勤務することとなり、風川教授の指導のもと脳血管内治療を中心とした臨床研究を行い学位を習得しました。平成 21 年には日本脳神経血管内治療学会指導医の資格も習得することが出来ました。これまで御教授頂いた多くの先生方への感謝を忘れず、現在も外科治療・血管内治療をバランス良くこなせる hybrid surgeon を目指して日々の研鑽を行っています。

筑紫病院は大学病院の名を冠していますが市中病院の性格が強く、脳卒中を中心とした救急医療が主体となっています。神経内科や脳血管内科などが無いため、必然的にラクナ梗塞などの minor stroke も脳神経外科が診療を担っています。多忙な日々ですが、地域中核病院として筑紫病院脳神経外科が果たすべき役割は非常に大きく責任を感じています。また、より良い予後を得るためには急性期治療から慢性期のリハビリテーション治療まで円滑な治療が必要です。現在、私は筑紫医師会を中心とした脳卒中連携パスの責任者としてシステムを構築し、筑紫地区での急性期治療施設から回復期リハビリテーション病院間の綿密な連携を構築・運営しています。

今後は、私自身も更なる臨床研究に取り組むと同時に、後進の先生方の治療指導・研究指導に努力して参ります。今後とも御指導・御鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。



筑紫病院消化器内科
准教授
平井 郁仁

2014 年 10 月より福岡大学筑紫病院消化器内科の准教授を拝命致しました平井と申します。浅学非才の私が大学の准教授になれたのはまさに僥倖としか言えませんが、松井教授のご推挙はもちろん、同門の先輩、後輩のおかげとっております。せっかくの機会ですから、これまでの歩みと今後の抱負についてこの場をお借りして少しだけ書きつづりたいと思います。私は平成 3 年に福岡大学医学部を卒業し、そのまま当時八尾恒良先生が主宰されていた福岡大学筑紫病院消化器科に入局致しました。研修医時代は難病（ギランバレー症候群）にも罹患し、公私ともに想像以上に厳しい生活でした。約半年のブランクとなりましたが、何とか乗り越え、福岡大学医学部大学院に進学しました。そこで、クローン病の長期経過をテーマとした臨床研究を行い、博士号を取得するに至りました。その後はしばらく院外出張で消化管内視鏡の研究に励み、救急医療を中心とした医師生活を送りました。この頃は学会発表や論文執筆などのアカデミックな活動はほとんどせず、ひたすら臨床に没頭する毎日でした。平成 16 年に救急部の助手（現在の助教）として福岡大学筑紫病院に戻ってからは、臨床だけでなく、研究にも取り組むようになりました。とはいえ、我々の施設では臨床研究がメインであり、小腸の形態診断や炎症性腸疾患（IBD）の診断、治療を中心に行ってきました。小腸の診療はカプセル内視鏡とダブルバルーン内視鏡という 2 つの内視鏡機器により劇的に進化した分野です。当科でもこれらの機器を用いた臨床研究で学会報告や論文としていくつもの成果をあげてきました。IBD に関しては、皆さまもご存じのように若年で発症することが多く、現在も増え続けている難治性疾患です。病因は不明で根本的治療はありませんが、病態解明が進んだことで治療はかなり進歩しました。IBD に対する治療が進化し続けている中に、この疾患

に取り組んでこられたことが私自身をも成長させてくれたと実感しています。今は厚生労働省の難治性炎症性腸管障害に関する調査研究班の一員として IBD の診断、治療を向上させるため、全国の先生方といくつもの多施設共同プロジェクト研究に携わっています。当科は IBD の治療実績が全国有数のレベルであり、これを先輩方が築いてこられた財産と考え、今後も精進していく所存であります。研究の詳細については割愛しますが、これからは今まで以上に全国いや世界に発信できるような仕事を目指して後輩とともにがんばりたいと思います。大仰な物言いに聞こえるかもしれませんが、当科だけでなく福岡大学の将来を明るくすることに少しでも寄与できたらと考えています。今年、NHK の大河ドラマで脚光を浴びるであろう吉田松陰は、「私が尊敬するのは、その人の能力ではなく、生き方であって、知識ではなく、行動なんです」と言っています。凡才の私ですが、能力や知識の不足を行動で補っていきたいと思います。今後ともどうかよろしくお願い申し上げます。



生理学講師
沼田 朋大

このたび、福岡大学医学部生理学講座の講師として就任いたしました。私は日本学術振興会・特別研究員として自然科学研究機構 生理学研究所、特任助教として同研究所で細胞容積調節能と細胞死の研究に従事した後、京都大学工学研究科、京都大学地球環境学堂（両任）助教を経て、現在に至っております。私はこれまで主に電気生理学的手法を用いてイオンチャネルの分子機能とその生理的役割の解明を目的に研究を行ってまいりました。最近では、膜伸展、温度、酸化還元状態など種々の物理化学的な環境変化を感知し、イオン流入を引き起こす transient receptor potential (TRP) チャネルの研究に展開しています。この研究では分子レベルから個体レベルまで統合的に理解するために、主に 2 つのテーマで研究を行っております。一つ目は、TRP チャネルは複数

学位取得

次の方は、平成 26 年 9 月 30 日付けで福岡大学より博士（医学）を授与されました。

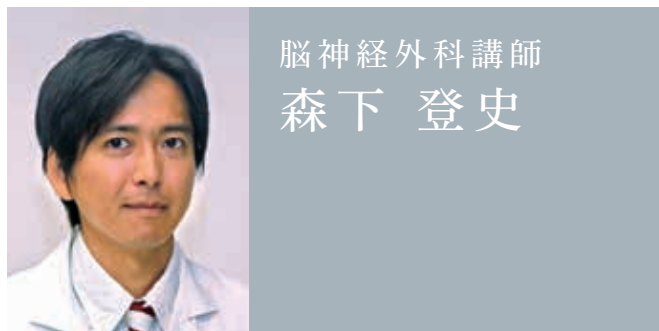
論文提出による
学位取得者

- ・高橋 晴彦（筑紫病院救急科 助手）
- ・樋口 仁美（耳鼻咽喉科 助教）
- ・別府 孝浩（筑紫病院消化器内科 助手）
- ・杉 恭之（学外者）

の刺激で活性化することから、複雑な活性化機構を持つことが予想されますが、この複数刺激の統合的活性化分子機構の解明を目指しています。この難解な問題の解決によりイオンチャネルの動作原理の理解へと繋がると考えております。また、二つ目は TRP チャネルの異常活性化や機能障害は、高血圧症、虚血性心疾患、骨粗しょう症、腫瘍性疾患、アルツハイマー病等、多くの病態に関わっている可能性があることから、このイオンチャネルの個体における役割の理解と TRP チャネルを標的とした治療法や新薬の開発を目指しております。

今後は、井上 隆司 教授が主宰される生理学講座で、TRP チャネルの機能と病態に関連する研究テーマを推進するとともに医学教育では、生理学の知識や技術から、いのちの仕組みをよく理解することを目指す過程で命の尊さも学んで欲しいと思っています。

東京都出身で福岡は初めての土地につき、少々不安もありますが今後ともご指導ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。



このたび、井上亨教授の御推挙により福岡大学病院脳神経外科の講師を拝命いたしました。私は、平成 16 年に日本医科大学を卒業し、同大学の付属病院で現在の初期臨床研修制度一期生として研修を受けました。パーキンソン病をはじめとする機能的脳疾患を専門にしたいと考えていた私は、平成 18 年に母校を離れ日本大学の脳神経外科に入局し、片山容一教授と山本隆充教授のもとで後期研修を受けました。同時に日本大学医学部大学院へと進学し、難治性疼痛に対する外科的治療法の一つである運動野刺激療法のメカニズムに関する実験を行い、成果を論文発表して学位をいただきました。その後、日本脳神経外科学会認定専門医の資格を取得し、日本学術振興会の海外特別研究員として米国のフロリダ大学に留学しております。

フロリダ大学では研究員と臨床医の二足の草鞋を履き、論文執筆ならびに患者の診察・治療を担当しました。研究面では、脳神経回路に関する機能解剖学とその臨床応用がテーマでした。臨床面では、二年間の間に約 600 件の手術症例を通じて、脳深部刺激電極、脊髄刺激電極そしてバクロフェンポンプの埋設の他、てんかん外科や脳腫瘍外科など幅広く経験しました。これらを通じて学んだことは、外科医一人の力だけではなく、多職種で一つ一つの疾患にアプローチしてゆくこ

とがいかに大切かということです。今後、福岡大学病院におきましても他科の先生方と連携をとりつつ脳神経系の疾患に取り組んでゆきたいと考えております。

上記の専門以外にも、井上教授より当院におけるロボットを用いたニューロリハビリテーションの分野を発展させるという大役を仰せつかっております。このように、今後は福岡大学病院で次々と新しい分野を開拓してゆきたいと考えております。また、研究と臨床の両側面から後輩達の教育にも尽力してゆく所存です。そのためにも、科や職種の壁を越え、皆様方からご指導ご鞭撻を賜れば幸いです。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。



このたび、臨床検査医学講師を拝命いたしました。九州大学を卒業後、九州大学第三内科（現病態制御内科学）講座に入局し、内科系研修と糖尿病臨床を 5 年間経験したのち、福岡大学生化学第二教室で細胞におけるタンパク分泌機構について研究いたしました。折しも、分子生物学的研究手法が目覚ましく発展を遂げる時期に遭遇し、池原教授、三角准教授のもとできびしくご指導いただいたのは大変幸運なことでした。その後、臨床検査医学に席を移し、疾患病因遺伝子の解析を続けております。遺伝診療への関心が臨床遺伝専門医の取得につながり、遺伝カウンセリングにも携わるようになりました。またこの頃、子育ての時期と相まって診療を離れ、検査部専任として仕事をしていたことから、常々、検査部における医師の役割や、検査診断学の推進と教育について考えて参りました。現在、検査部においては、臨床検査専門医として検査相談室、遺伝子検査室の技師たちと共に日々研鑽し、また NST や遺伝医療室におけるチーム医療にも一緒に参加しております。検査診断学は M4 の講義として復活され、現在に至っておりますが、臓器別ではなく横断的な医学の知識は、診断には欠かせない物であり、この重要性を是非学生に伝えたいと考えております。M5 の BSL では、金曜日に Reversed CPC の講義をしております。患者の血液・尿検査や生化学検査などの基本的な項目の結果のみが記載してある一枚の A4 用紙を前に、どのように鑑別診断を進めていくのかを学生と議論いたしますが、これまで学んだ（しかし忘れた）医学知識が疾患の診断という実践にいかに関与するかについて、多くの学生が目を輝かせることに希望を感じております。また、近年は女子学生が多くなりましたが、女性医師が

充実した診療や研究を続けるにはまだまだ厳しい状況と感じております。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



呼吸器・乳腺内分泌・
小児外科講師
吉田 康浩

このたび、福岡大学病院呼吸器・乳腺内分泌・小児外科 岩崎昭憲教授の御推挙により講師を拝命いたしました。

私は福岡市で生まれ育ち、平成 13 年に福岡大学医学部を卒業後、当時の福岡大学医学部第二外科教室に入局いたしました。当院および筑紫病院で研修医生活を送り、平成 16 年より福岡東医療センターで、呼吸器外科を専門に臨床に携わるようになりました。私の胸部外科医としての基礎はこの時代に培ったものだと思います。

平成 20 年に福岡大学大学院に進学し、細胞生物学 白澤専二教授のもと、主に大腸癌発症に関連する KRAS 遺伝子を中心に、遺伝子研究に勤しみました。研究の技術や知識をご教授頂いたものはもちろん、研究に対する姿勢や考え方を教えて頂いた事が、私の中で財産となっています。また、時間をかけ、じっくり研究に没頭できたのは、当時の医局員のサポートがあつてのものだったと今でも感謝しております。

平成 23 年からは呼吸器・乳腺内分泌・小児外科の助教として、臨床に復帰し、現在に至ります。産まれも育ちも福岡で、福岡大学内で臨床や研究を行ってきましたので、自然と面識がある先生方が増え、日々の診療でも大変、助けられております。

福岡大学に育てられた私は、少しでもお世話になった先生方の思いを、若い医師や学生に繋ぐ役目を果たせればと考えております。

また、実臨床においては、当科は肺癌に対する治療を中心として、多様な胸部疾患の治療に加え、肺移植を行っており、最近ではロボット手術の導入が計画されています。私も教室の一員として、更なる発展に貢献できるよう努力精進する所存でございますので、今後とも御指導、御鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

福岡大学医学会第 71 回例会報告

日時：平成 27 年 2 月 24 日（火）18 時～19 時
場所：医学部臨床大講堂

【進行】集会幹事 今福 信一

- 1) **開会の辞** 集会幹事 今福 信一
- 2) **会長挨拶** 医学部長 朔 啓二郎
- 3) **新任講演** 座長…朔 啓二郎 講演 25 分、質疑応答 5 分
講演者…山浦 健（麻酔科学 教授）
「これからの周術期循環管理」
- 4) **福岡大学医学紀要 41 巻優秀論文賞授与式**
受賞者：倉員 正光（産科婦人科学）
- 5) **受賞論文の要旨講演** 講演 10 分（質疑応答含む）
講演者…倉員 正光 座長…宮本 新吾
「Rapid Progression of Nulliparous Labor Increases the Risk of Preterm Delivery in a Subsequent Pregnancy」
- 6) **閉会の辞** 集会幹事 今福 信一



講演された先生方を囲んで（左から宮本先生、山浦先生、倉員先生、朔医学会会長）

教室だより
Letter from a classroom



福岡大学筑紫病院
循環器内科

当科は循環器疾患、特に心疾患を専門にしていますが、血管領域全般（中枢および末梢動静脈）、二次性高血圧症、難治性高血圧症にも目を向け、生活習慣病（高血圧・脂質異常症・糖尿病・高尿酸血症・メタボリックシンドローム）やさらに最近では心不全・不整脈とも重要な関連がある睡眠時無呼吸症候群も含めて、総合診療修得を心がけています。

講座を構成する教室員は教授、診療教授、講師各 1 人、助教 5 人、助手 3 人の計 11 人が常勤、さらに秘書 4 人です。循環器専門医が 8 人、内科認定医が 10 人（総合内科専門医 4 人）不整脈専門医 2 人、高血圧専門医が 2 人、心血管インターベンション認定医が 2 人、旅行医学会認定医 2 人、プライマリケア連合学会認定医 2 人、救急医学会専門医、集中治療学会専門医、抗加齢学会専門医、禁煙専門医、心臓リハビリテーション認定指導医など各認定専門医が常勤し、日本循環器学会認定教育施設というまでもなく、地域医療支援病院として高機能な医療を提供しております。実際の診療面では、年間循環器疾患外来患者数は約 1 万人、年間入院患者数は約 6300 人です。年間循環機能検査件数は、心臓カテーテル検査約 650 例、心エコー検査約 4000 例、下肢静脈エコー検査約 40 人、臨床心臓電気生理学的検査約 40 人です。また、年間循環器疾患特殊治療件数は、経皮的冠動脈インターベンション（バルーン拡張術、ステント留置術）約 130 例、大動脈などの経皮的血管形成術約 20 例、永久ペースメーカー植込み術約 40 例、カテーテル心筋焼灼術 15 例です。いずれの治療も重篤な合併症は認めず、良好な成績を収めています。

また、1 年 365 日 24 時間体制で循環器救急に対応しており、少しでも地域医療に貢献していくよう心がけています。さらに、基本的には循環器内科ですが、医局員全員が救急部、ICU 当直を行うことによって循環器疾患以外の 2 次および 3 次救急の仕事をしています。このことで、循環器という専門性にとらわれることなく幅広い分野をこなせる内科医の育成を心がけています。専門性が重視されるあまりに専門以外の患者を敬遠する医



師が増えつつある今、当医局では救急医療を含めた内科全般をカバーできるようにプライマリケアを基盤にした循環器専門の技術・知識を備えた医師の育成に力を入れています。

地域密着型の臨床病院である利点を生かして地域医師会や病院および病院連携による臨床研究や疫学的研究を通し、さらなる地域医療への向上・発展を推進すべく体制作りを行っています。その中の一つである筑紫循環臨床研究ネットワークでは、現在 290 名の先生方にご参加いただいております、循環器病学の診断・治療に関する最新の情報を共有し、日常臨床にお役立ていただくとともに、循環器疾患の治療薬に関する医師主導型の多施設共同試験を実施し、循環器病学の向上に取り組んでいます。今後は、さらなる地域の先生方との医療連携としてもお役立ていただけるのではと考えております。

最後に、循環器内科は、さらなる医療の向上・充実に努めていく所存です。また、医療連携をさらに充実させていきたいと考えております。平成 25 年 5 月開院の新病院では、ICU・HCU の新規設置、血管造影室の 2 台への増設、心臓リハビリ及びシンチを新規に開始しました。また、緊急カテーテル治療、重症心不全などに対応できる 24 時間体制の循環器救急の更なる充実を図りました。引き続き、先生方のご教示・ご協力を賜りたいと存じますので、ご理解のほどよろしくお願い申し上げます。

祝 福岡大学医学紀要第 41 巻 優秀論文賞

倉員 正光（産科婦人科学）

「Rapid Progression of Nulliparous Labor Increases the Risk of Preterm Delivery in a Subsequent Pregnancy」

教室だよ
Letter from a classroom



産科婦人科学

診療

産婦人科は現在医局員数が 39 名の、病院設立当初からある診療科で、女性の一生を見守っていく科でもあります。

婦人科 29 床、産科 31 床（合計 60 床）は他科と同様にいつも満床で、外来でも 1 日平均 100 人を診療しています。そんな産婦人科の最大の特徴は、周産期、婦人科、生殖内分泌の 3 領域において、高度医療を実践していることです。

周産期では 1988 年に総合周産期医療センターをオープンしました（現在 MFICU7 床、NICU15 床を擁する）。母体や胎児・新生児に対して一貫した治療を行うとともに、緊急搬送に 24 時間体制を敷いています。分娩が年間約 460 例あり、そのほとんどがハイリスク妊娠です。帝王切開の割合は 50%を超えています。

婦人科は子宮がんや卵巣がんなど、年間約 500 件の手術と放射線・化学療法を組み合わせた集学的治療を行っています。良性疾患には、腹腔鏡など内視鏡を用いて多数の患者さんの心と体のダメージを最小限にする医療を目指しています。

また生殖内分泌では、不妊治療をはじめ習慣流産や子宮内膜症の治療、更年期外来はホルモン補充療法や漢方療法などにより症状の改善を目指しています。

EBM 実践にともない膨大なデータを保有

このように難しい症例も含めて多数の疾患を扱う当科では、EBM(エ

ビデンス・ベースド・メディシン)を実践しており膨大なデータを蓄積しています。そしてそれらは若手医師にとって、学位取得に活用できる貴重な資料にもなっているのです。もちろん学位や専門医資格取得をバックアップする大学病院としての教育にも注力しています。当科内での指導のほか、不妊治療分野を専門におこなう医療機関との提携などで産婦人科医療全般のスキルアップをサポートしています。

子育て支援

働きやすい環境づくりにも力を入れており、結婚、子育てなどでフルタイム勤務が難しくなったドクターには状況に応じた勤務形態を用意し、復帰支援も積極的に行っています。臨床も研究もドクターの「やりたい事」を尊重する、働きやすい職場になるよう努力しています。

ホームページアドレス

http://www.med.fukuoka-u.ac.jp/obst_gyn/



平成 26 年度

文部科学省医学教育等関係業務功労者表彰について

高本睦夫氏 医学教育等関係業務功労者表彰受賞祝賀会



中央：高本 睦夫 技師、左：朔 啓二郎 医学部長、右：久保 真一 法医学講座教授

平成 26 年 11 月 20 日、ホテルフロラシオン青山(東京)にて文部科学省による平成 26 年度医学教育等関係業務功労者の表彰式が行われ、本学部法医学講座の高本 睦夫 技師が受賞しました。表彰式では、山中文部科学事務官より表彰状と副賞が授与されました。

この表彰は、大学における医学又は歯学に関する教育・研究もしくは患者診療等の補助的業務に長年に従事され、顕著な功績のあったものに対し行われるものです。